

そして弥生時代後期末から古墳時代前期の集落には、周囲より地盤の高い自然堤防上に掘立柱建物やゴミ捨ての穴、集落を区画する溝など昔の人々が生活を営んだ痕跡が残されていました。特に建物の柱穴には柱材が残り、炭化木や土器を多量に出土する穴などが見つかりました。この自然堤防の北側に広がる低地部では、井辺遺跡では初めて古墳時代前期の水田が見つかりました。水田は網目状に広がる畦畔（畦）によって区画された長辺約 5.0m、短辺約 4.0mの小

さく狭いもので、調査では現在 15 区画程度確認しています。このような水田が見つかることは、県内でもめずらしいことです。

これらの集落や水田は、縄文時代以降この井辺の地に生活の糧を見出した先人の足跡であり、今回の調査では、井辺遺跡集落内部の様相について新たな知見を得ることができたと考えます。



写真1 2区、3区北半
全景

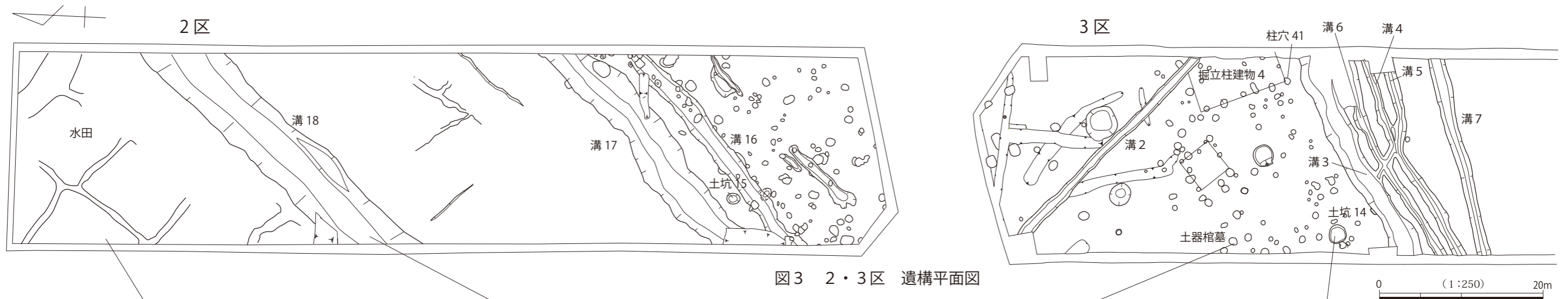


図3 2・3区 遺構平面図



写真2 2区 水田



写真3 2区 溝18
全景



写真4 3区 土器棺墓



写真5 3区 土坑14 土器・炭化木材
出土状況